

馬琴の水滸観

水滸の三隠微について

BAKIN'S VIEW OF THE CHINESE NOVEL *THE WATER MARGIN*

李 樹 果*

Takizawa Bakin made a thorough study of *The Water Margin*. His comments on *The Water Margin* can be seen in a great many of his works beginning with the introduction to *Hakkenden*. I would like to discuss Bakin's view of *The Water Margin*, in particular what he called its “three esoteric ambiguities.” Bakin refers repeatedly to the idea of rewarding good and punishing evil in *The Water Margin*, but is *The Water Margin* in fact a novel with such a theme? On the basis of various arguments I think that it is fair to say that the author of *The Water Margin* had no such purpose in mind. Bakin misunderstood the term, “Bai-shi-dao.” It is also doubtful that the author of *The Water Margin* attributed meaning to the personal names “Hong Jin” and “Wang Jin” to the depth which Bakin's inquiries took him.

* LI Shu Guo 中華人民共和国、南開大学外文学部教授。東京商科大学（現一橋大学）に学び、中国の東北大学経済学部を卒業。現在、中国日本文学研究会、中日比較文学研究会などの理事。『南総里見八犬伝』を中国語に翻訳。「水滸伝の江戸小説に及ぶ影響」（『日本文化研究叢書』1990年）、『読本の発生と明清小説』（『中日比較論文集』1992年3月）他論文多数。

馬琴は博識強記、学は和漢古今に涉り、特に『水滸伝』に就いては深く研究しておられ、『水滸伝』についての批評は『八犬伝』の序文や簡端附言などによく見られます。その他『玄同放言』や『半間窓談』などにも多くのせています。手元に資料が足りないのので、その断片的な資料をもとにして、馬琴の水滸観についての管見を述べさせていただきます。

馬琴がその愛読していた『水滸伝』をどのように見ていたのでしょうか。馬琴は『玄同放言』の「金聖嘆を語る」の条で

水滸伝は十説の巨擘にして古今の敵手なけ共、今に論議の多かるは勸懲に遠ければなり。

と言っておられました。つまり流石の『水滸伝』も勸懲への配慮は不十分だと言ったのです。それから『八犬伝』の「第九輯卷之三十三簡端附録作者総自評」に

水滸は……寔に是稗史の大筆、和文の師表なるものから、只其足ざる所をいはば……勸懲隱微にして、よく是を悟る者なし

といました。馬琴は『水滸伝』を稗史の大筆に讀えているので、自然にそれも勸懲を旨としなければなりません。ただ惜しいことにはその勸懲があまりにも隱微であって、一般の人がよく分らないのが残念だということです。さらに又「卷之三十六簡端附言」に

百八人の義士多く陣歿して最後に宋江・李逵等、毒を仰ぎて死に至れり、看官遺憾しく思ふめれど、こは勸懲に係る所、果敢なく局を結べるに則作者の用心なり。

これらを見て馬琴の認識も次第に明らかになって、勸懲に遠しから、勸懲による作者の用心だとあからさまにいつて来ました。そのことについては今中国の一般の見方として、答えはそうではないのです。

まず第一に宋江などの梁山の豪傑を悪人と見ていないのです。かれらの多くは何かの原因で逼られて梁山に上がり、一時賊となったのです。つまり「官が民を逼って反乱を起こす（官逼民反）」ことが主な原因なのです。例えば解珍・

解宝や林冲などの豪傑は無実の罪で死刑や流罪に処せられ、さんざんにいじめられて、やむを得ず梁山に上がって賊にならなければなりません。又魯智深・武松などは不平なことを見て、いじめられた方の肩をもったため、罪を犯し、捕られる身となり、最後に梁山に上がりました。なお晁蓋・呉用・阮氏三兄弟などは悪官吏の人氏からの収奪に対して憤りを感じ、梁中書の収奪した不義の財を奪いとったため、官府に検挙され、梁山に逃れこんだのです。彼らは一時賊となりましたが、決してあくまで朝廷に反抗しようとしたのではなく、ただ帝王の左近に居座った高俅・童貫などの悪官吏を一掃しようとしただけです。そこで「替天行道」（天に替って道を行う）というスローガンを掲げ、招安したあと、命がけで朝廷に奉仕し、多くのものが陣歿され、宋江等は奸臣に毒死されました。その当時の道德準則で評価しても忠人義士といわなければなりません。善人が悪報を得たとは明かに勸懲の準則に違えることで、馬琴もその点を見ぬいたのでしょう。そこで水滸の隱微ということが出たのです。

彼は『半間窓談』に「抑水滸伝に三等の深意あり」として初善中悪後忠の三等をかなり詳らかに説く所があります。原文は手元にないので、中村幸彦先生の紹介によると、

宋江等百八人ははじめは善人であったが、悪人の為に罪を犯して罪余の刑人となり、梁山泊に入って、盗を事とした。これが中悪である。後に詔安に応じて、忠義となり国事に尽したが後忠である。

つまり馬琴は宋江等の一生を三段に分けて、中悪といったのはいかなる理由があるにせよ、賊となって朝廷に反抗した以上は悪人といわなければならないというのです。それは認識いかんによることで、中国では例え朝廷に反抗したとしても必ずしも悪人とはいえないのです。なぜなら、中国の歴史をひもといて見れば、二千年の封建社会の歴史は朝代がわりの歴史であって、その動因になるのは主に農民蜂起なのです。そこで「成者王侯、敗者賊」という言い方があって、つまり蜂起に成功したものは帝王となり（たとえば漢の高祖劉邦、明の太祖朱元璋など）、失敗したものは賊となります（たとえば宋の黄巢、明

の李自成など)。宋江等のような、一時朝廷に反抗した豪傑に対しては人民大衆は決して悪人と見ていなかったのです。はやくも宋末に『宋江三十六賛』という画賛があって、それから『大宋宣和遺事』という手話に宋江などの英雄的故事が伝えられ、元代からすでに『水滸』の英雄たちを讃える芝居が沢山あって、今にも『水滸』を演ずる京劇は人民大衆に好まれています。勿論『水滸伝』の作者も同情的な筆調で『水滸』を綴ったのです。そのため『水滸伝』は一時禁書になったこともあるぐらいです。それでは『水滸伝』の勸懲となる前提がなり立たないわけです。

そこで馬琴は三等の深意についてさらに次のように解釈しています。

竟に後栄あることなく、みな奸臣に陥れられて、果敢なく枉死したりしは、中ころ魔行の悪報にて、亦是勸善懲悪の作者の用意ここにあり、宋江等百八人、忠義を尽して賞を得ず過半王事に死したればこそ、旧悪竟に消滅して、忠信義烈虚名にならず、世々に惜まるゝが、前伝作者の本意也。

(『半間窓談』)

このことについてはまず第一に、宋江等大部殺されたということは悪人に対する悪報との作者の用意ではないと思います。なぜなら宋人の洪邁の『夷堅志』(注：宋代末期の筆記小説です。中に民間に伝えられていた伝説などを記録していたという)によれば、梁山泊五百人が投降したあと既に悉く殺されたと記されています。中国の演義小説の作者は稗史にわりあい忠実だから、むしろ伝説によった安排だと見た方が自然です。次に『水滸伝』の結末に朝廷が宋江等の死がわかって梁山泊に廟と像を立て、彼らを神様として百姓が四時祭っていたとあるから、作者の勸懲の用心があると見られるどころか、彼らの死に対する傷みを示しているのです。

さらに反問したいと思います。宋江等は投降したのち、あれほど忠誠を尽したのに、若し死ななければ、旧悪を消滅して善人となれないのでしょうか。この点はどうも牽強であるように思われ、全く彼の勸懲主義からのせんさくなのでしょうか。

馬琴は『水滸伝』に三つの隠微があるといいましたが、以上は『水滸伝』の
本意についての隠微です。他に筋の設置にも隠微があります。それは『水滸伝』
の第一回「洪太尉誤走妖魔」の本文に、

あの一道の黒氣が、たゞちに半天にのほり、空中に散じて、百十道の金光
となり、四面八方にぞとびさりける

とあるから、妖魔は百十人でした。そこで百八人の豪傑の外の二人は高俅と晁
蓋がこれを埋めます。この二人とも百八人の豪傑と共に宋の天下を乱した者で
す。この点は恐らく馬琴の誤解であったのでしょうか。「百十道」というのは俗
語の百ぐらいという大よその数字であって、具体的に百十と言ったのではない
のです。考えてみればあつという間にはっきり数えきれないから、大まかに百
ぐらいといったのです。その正しい数字はすぐ次のページに出ています。

この殿内に鎮めとざするは……共に百八箇の魔君ここにあり。

はっきりと百八箇と断わって、何の隠微もないのです。それからたとえ二人埋
めるにしても、高俅が入るわけがありません。高俅は梁山の英雄ではなく、そ
の敵手なのです。馬琴は「百十道の金光」という俗語によく理解しなかったた
め、あまり穿さくし過ぎだと思えます。

次に第三の隠微は、洪進と王進は前後身、王進は史進とは一体ということ
です。詳しく申し上げる時間もないので、それは馬琴のよく弄んだ「名詮自性」
のことで、外に馬琴が『水滸伝』の中の盧俊義と燕青などについても晋の張華
の『博物志』を引用して名詮自性による命名考を試みたことがあります。馬琴
のこのような手法は謎を解く智者の遊びみたいな趣きがあって、馬琴文学の特
色の一つなのです。中国の古典文学にこのような手法はないのでもないが、馬
琴のように「名詮自性」を振廻す作者は見られません。『水滸伝』の作者は果
して彼の言ったように、作品中の人物の命名にかかる深意を有していたかどう
かははかり知れないことです。これらのような穿さくはただの遊びだから、た
とえ正鵠を射たとしても、何の意義もないことで、今までそのような発明が未
だ見られないのも自然なことです。これも馬琴の考証癖によった特別な趣味な

のでしょう。

以上は馬琴の水滸の三隠微のことについて拙見を述べましたが、外に馬琴が『水滸伝』の作者の問題や怪談のことと人物設定などのことについてもいろいろ論じたことがあります。時間のためそれらのことは別な機会にゆずらせて、話を終らせていただきます。

討議要旨

渴沼誠二氏から「馬琴は水滸伝の原文をきちんと読んでいたのだろうか。水滸伝は、当時岡島冠山が訳したものがあったが、冠山の訳が途中までで、後はあまり適当でない翻訳がなされ、全訳となっている。つまり、馬琴はかなり不備な翻訳で水滸伝を読んだのではないか。」という意見が出された。発表者は「冠山の中国語の力には確かに問題がある。馬琴は翻訳で不合理なところは自分で穿鑿して、理解したのではなかろうか。」と答えられた。